

映画「砂の器」は小説をどう補修したか

藤井淑禎

拙稿「清張と純文学派―対決の構図―」（拙著『清張 闘う作家―「文学」を超えて』所収、二〇〇七・六）では冒頭で『砂の器』に登場する若手の文化人グループ「ヌーボー・グループ」を取り上げ、このモデルとなったのが、安保改定に反対して若い芸術家たちが立ち上がった「若い日本の会」―江藤淳、石原慎太郎、大江健三郎、武満徹、浅利慶太らが主要メンバーであることを指摘した。そしてそのなかでも江藤淳（清張と対立する純文学派のホープ）をモデルとする評論家の関川重雄が、刑事の今西栄太郎によって第十四章（作品自体は全十七章）の途中までにはもっとも有力な容疑者とされ、しかし結局犯人は関川ではなかったのだから、その意味では重要なダミーの役を割り振られていたと指摘した。しかし、この関川Ⅱダミー説はやや舌足らずな説明であったので、本稿ではそのあたりを中心に再説を試み、さらには映画とも比べながら『砂の器』に新たな光を当ててみたい。

I

映画「砂の器」が、小説『砂の器』（『読売新聞』夕刊、昭和三五・五・一七―三六・四・二〇。単行本の刊行は三六年七月）の刊行から一三年も経ってから製作・公開（昭和四九・一〇・一九封切り）されたことは、特異な例の一つとして一部ではよく知られている。

小説の発表からさほど間を置かずに映画化されることの多い清張作品としては珍しい部類に入るからなのだが、映画化が遅れた理由としては、作中で重要な役割を果たす「ライ病人」の扱い方のむずかしさ、作中の複雑な人間関係が小説と違って読み直すことが不可能な映画という媒体には向かないことなどが、従来漠然と考えられてきた。

もちろんこの二つも、大いに可能性のある理由ではある。前者について言えば、昭和三八年発表の遠藤周作『わたしが棄てた女』に出てくるハンセン病（主人公が発病を疑われ、その疑いが

晴れた後、ハンセン病療養所で働くが、昭和四四年に浦山桐郎監督によって映画化（「わたしは棄てた女」）された際には療養所が単なる老人ホームに置き換えられてしまうという時代であり、いくら昭和三五年公開のアメリカ映画「ベン・ハー」にハンセン病が登場してくるからといって、それを日本映画において正面切って表現するにはまだまだいろんな制約があったのかもしれない。

後者のほうも、小説では、ヌーボー・グループの中心人物として評論家の関川重雄と音楽家の和賀英良の二人が登場し、それぞれ、バーの女給の三浦恵美子、劇団事務員の成瀬リエ子という愛人がいて、流産死やら自殺やらで話を複雑化していたが、映画ではそれを、男性のほうは和賀に、女性のほうは女給の高木理恵子に一本化することで、「複雑さ」問題を処理している。もちろんこれも本稿で言う「補修」と無関係ではないが、本稿で言う「補修」は、複雑な人間関係を映画向きに単純化、などというようなよくあるケースとは次元が異なっている。

本稿で言う「補修」とは、文字通り、小説の欠陥なり綻びなりを「補修」という意味であり、そうだとしたらそのための作業もまた映画化が遅れた理由の一つだったのではないか。それでは、いったい小説『砂の器』には、どのような欠陥があったのだろうか。

結論を先に言ってしまうと、蒲田操車場殺人事件の犯人として刑事の今西栄太郎は、ヌーボー・グループの一員である評論家の関川重雄への疑いを深めていくのだが（第十一章「彼女の死」）、今西がそう推理していく根拠が実は作中のどこにも見当たらない

のだ。さらに今西は、関川への疑いを持ち続けながら、音楽家の和賀英良をも容疑者候補としてリストアップしていくのだが（第十三章「糸」）、これまた同様に、根拠もないままに、そのように推理を進めて行っているのである。

ミステリーとしては致命的な欠陥であると言わざるをえないが、以下では、具体的に今西の推理過程を追うことで本当に根拠もなく彼らを犯人視していたのかを、確かめていくことにしよう。その際、並行して、読者には犯人像はどのように推理できるように書かれていたかも、確認していくこととする。読者に与えられた情報と今西に与えられた情報とはもちろん異なり、にもかかわらず作者がそれらを混同した可能性もあるからである。

なお、基にする本文は単行本所収のものとし、必要に応じて適宜新聞連載文をも紹介する。先走って言えば、単行本所収文は新聞連載文にとりどころ手を加えてはいるが、本稿で言う「欠陥」に関しては両者のあいだに根本的な違いは存在せず、したがって、新聞連載文にあった欠陥が単行本において補修されたということも、逆に、最初はなかった欠陥が単行本において生じたということも、どちらもなかった、とひとまずは言うことができる。

II

よく知られているように、『砂の器』における蒲田操車場殺人事件は、被害者と連れの男が入ったバーの女給たちが耳にした、東北弁と「カメダ」という言葉を手がかりとして捜査が始まっている。「カメダ」は当初は姓と目され、そのなかでも当然東北出

身者が有力視されたが、目立った収獲はなく、そうこうしているうちに地名である可能性が浮上し、秋田の羽後亀田という所から、見慣れぬ人間が町をうろついていたとの情報もたらされる。

捜査がお手上げ状態の中、わらにもする思いで今西と若手の吉村が亀田に派遣されたが、結局不審者のしっぱをつかむことはできず、捜査は振り出しに戻る。旅の途次、今西と吉村は車中で、今をときめく若手文化人グループである「ヌーボー・グループ」の一行を見かけて印象にとどめるが、むしろこのことは事件や捜査とは何の関係もない。亀田の不審者探しが空振りになった以上、すぎるべき手がかりは以前と同じ、返り血を浴びた衣類であり、蒲田近辺にあるかもしれない犯人のアジトであり、犯人のその後の足取りであったのだが、捜査は行き詰まり、一ヶ月で捜査本部は解散となる（第四章「未解決」）。

今西たちが見かけたヌーボー・グループの人々を紹介する章がそれに先立って挿入されている（第三章「ヌーボー・グループ」）。T会館でのR新聞社主催のパーティから銀座のクラブ・ボヌールへと、ヌーボー・グループの移動とともに場面が転換し、この章の最後は、同じ夜の渋谷近くのアパートでのクラブ・ボヌールの女給三浦恵美子と評論家関川重雄との逢い引きで締めくくられている。ここで強調されているのが、人目を異常に気にする関川の態度と、タクシীর運転手に指摘された関川の東北訛りだ。もちろん、これらは今西の知るところではないが、読者は関川が犯人ではないかという方向へとやんわりと誘導されている。

第四章「未解決」では新たな展開として、滝野川の今西の家の近くのアパートに「新劇の女優」が引っ越してくる。そしてそれ

に続いて、近くの巣鴨の駅前通りでのタクシールと自家用車との交通事故の話題が登場する。タクシীর客は「音楽家」で、翌日今西は新聞記事でそれが亀田で見かけたヌーボー・グループの一員である和賀英良であると教えられる。

ここで場面は転換して、政治家田所重善の娘で彫刻家の佐知子をフィアンセに持つ和賀のぜいたくな病室に見舞い客やマスコミがとつかえひつかえ訪れる場面が描かれる。これも今西不在の場面であり、今西を排除したところで読者は和賀の本籍地が「大阪市浪速区恵比寿町」（初出では広島市紺屋町）であることを教えられるが、この段階でより重要なのは、見舞いに来たヌーボー・グループの仲間たちが噂する、和賀がなぜ自分の車でなくタクシールで巣鴨などを走っていたのか、ひょっとして佐知子以外の女性と同乗していたのではないか、そしてそれらのやりとりを和賀とも知り合いの前衛劇団員の俳優の宮田邦郎が聞いて表情を曇らせていた、などといった情報だろう。読者は、今西の家の近くのアパートに「新劇の女優」が引っ越してきたという情報とあわせて、和賀と彼女との関係の想像へと、またしてもやんわりと誘導されるのである。

Ⅲ

第五章「紙吹雪の女」では、事件発生から二か月以上たってようやく被害者の息子が名乗り出て、殺害されたのは元巡査で岡山県在住の三木謙一という男性であり、伊勢詣での途次の奇禍であったことが明らかとなる。しかし、息子の彰吉にはカメダも東

北弁も心当たりがなく、この点については特に進展は見られなかった。このことについて少し先走って確認しておくと、有名な「方言トリック」が披露され、出雲地方では東北弁に似たズーズー弁が話されており、そこには「カメダ」に似たカメダケ（亀嵩）という場所もあり、しかもそこは巡査時代の三木の任地であったことが明らかにされるのは次の第六章「方言分布」においてであった。

したがって、出雲の件が明らかとなった時点で関川の東北出身設定は、犯人推理に挑戦中の読者にとって（この時点では今西はまだ関川に関心を寄せておらず、もちろん出身地も知らない）、ほとんど意味を失うことになる。この出雲弁の特徴に関する情報は読者と今西の双方に与えられたにもかかわらず、このあとも、読者に対して思わせぶりに関川が秋田出身であることが念押しされたり（関川と恵美子の会話の中。第八章「変事」、今西が関川の元の本籍地（秋田県横手市）を気にする場面が描かれたりしている（第十一章「彼女の死」）。第六章以降においては東北弁⇨出雲弁とみなしてよいのだから、こうした、相変わらずの東北地方へのこだわりは、些細ではあるけれども綻びの一種であると言ってもいいかもしれない。

少し先を急ぎ過ぎたようだ。進行をもとに戻そう。第五章では、関川の愛人の恵美子が川口にある、今西の妹の経営するアパートに引っ越してくるエピソードが語られる。今西はそのことを「銀座のバーの女給さん」が引っ越してきたとのみ妹から聞かされるが、読者のほうは荒川の土手を歩きながら交わす関川と恵美子の会話によって、関川が相変わらず二人の関係を人に知られるのを

極度に恐れているのを念押しされることになる。

もつとも、関川によればその理由は、「どうにか世に出かっている大事なとき」に「つまらない噂を立てられて、その出ばなをくじかれて」はたまらない、というものだったけれども。ともかく、この時点ではまだ、東北弁⇨出雲弁の情報は出てきていないのだから、読者は関川への疑いをさらに深めることになったかもしれない。

第五章で次に登場するのが章題にもなっている有名な「紙吹雪トリック」だ。ある新聞記者が目撃した、中央線の列車の窓から紙吹雪をまく女のエピソードを知り合いの大学教授がエッセイに書き（第五章「紙吹雪の女」、それを今西がたまたま読んで「何かがひらめいた」（第七章「血痕」）という、周知のエピソードである。この第七章では、今西が線路沿いを歩いて紙吹雪ならぬ「シャツの布地」を拾い、血痕らしきものが見ついていたのを鑑定に出して、被害者の三木と同じO型であることが判明し、断定はできないものの、当初から捜査対象の一つであった「返り血を浴びた衣類」の始末をこの女が頼まれたのではないか、というところまで話は進んでいく。

そればかりでなくこの第七章では、犯人とつながる紙吹雪の女自体の探索は行き詰ったものの、第四章で紹介された、今西家の近くのアパートに越してきた女が自殺するという事件が起き、そのことを耳にした際、「ふと、彼の頭によぎるものがあつた」。「彼」とはもちろん今西のことであり、やや強引な展開の感もあるが、このあと今西が女の部屋や持ち物を検分した結果、この女が犯人の情婦の紙吹雪の女と同一人物であったことがこの第七章におい

て確定する。

IV

二人の女を結びつけたのは、今をときめく女優の岡田茉莉子似という特徴であり、「黒のスーツ」と「スチュワードスの持つていくような小型の」「青いズックのスーツケース」であった。三つとも目撃した記者が証言したもので、それがアパートの女の場合と一致したのである。初出では身の回りのものの一致はスーツだけだったから、そこに特徴のある「青いズックのスーツケース」をプラスすることで、同一人物であることが強められている。

あれほど探している女が、つい目と鼻の先にいたのだ。灯台下暗し、とはこのことである。まさか「紙吹雪の女」が、前に何度か見かけた近所のアパートにいる新劇の劇団事務員とは思わなかった。まるで、夢のような話だった。

しかも、その女が自殺した。今西の驚愕は、二重だった。

（第七章「血痕」）

紙吹雪の女の正体までは明らかとなったが、問題はそこから先である。紙吹雪の女の相手Ⅱ犯人はだれなのか。実はこの点をめぐっては、今西と読者の情報量には大変な差があった。それは言うまでもなく、すでに紹介した第四章での、巣鴨近くでなぜかタクシーに乗っていて事故に遭遇した和賀をめぐるのヌーボー・グループの仲間たちの噂話であり、今西のあずかりしらないそこ

での情報は、和賀とアパートに越してきた女との特別な関係を示唆していたのだから。

この女は第四章では今西夫婦の会話の中に出てくるだけで、名前も明かされないし、「新劇の女優」という間違った紹介のされ方をしているが、第七章の自殺事件に行く前に第五章でかなりのスペースを割いて描かれている。川口の家に帰る妹と今西夫婦が三人で道を歩いていると「背のすらりとした」その女とすれ違い、その女をめぐる話題となるのである。女は実は新劇の女優ではなく事務員で、「かわいい顔」をしており、家賃も安くないので「だれかパトロンがいるのかしら」というようなことも話題となる。第四章末尾の和賀と女との関係の想像を補強する発言だ。

その次は部屋での女の描写となり（当然、今西の視野の外）、名前が成瀬リエ子であること、管理人室にかかってきた男からの電話に迷惑そうに対応していたこと、日記代わりのノートに三年間の愛の虚しさを記していたこと、そしてそこに窓の下から口笛が聞えて来る、というような情報が読者に提供される。

アパートの前あたりで「ベレー帽をかぶった男」が口笛を吹くところは、妹を駅に送った帰りの今西夫妻も目にとめていた。ただし今西は単なる「職業的な習慣」で男のほうに目を向けただけで通り過ぎたが、読者のほうは、男がリエ子の部屋の窓に向って二〇分ものあいだ口笛を吹いたり見上げたりしたあげくにすし屋に入り、そこで先客からサインを求められることで、彼が、第四章で和賀の女性関係の話題に顔を曇らせていた俳優の宮田であることを教えられる。つまりこの第五章末尾までで読者は、和賀とリエ子の関係を心配げに見守る宮田、という構図まで辿りついた

とみてよいのである。

そしてこの部分が、前述の第七章でのリエ子＝紙吹雪の女＝犯人の情婦、という部分につながっていく。要するに、精読者であれば、第七章のこの部分まで読み進めば、リエ子の愛人の和賀こそが蒲田操車場殺人事件の犯人であるという結論にまで達することが可能だったのである。

V

しかし、読者に比べて大幅に情報量の少ない今西の場合はそういうわけにはいかなかった。紙吹雪の女＝リエ子まではわかったが、愛の苦悩をつづったりエ子の日記が抽象的な記述に終始していたこともあって、犯人であるはずのその相手まではわからなかった。唯一の手づるは、以前リエ子の部屋の下ですれちがった「ベレー帽の男」だけだったが、運よくその男が俳優の宮田であることをすし屋の亭主から教えられ、翌日今西は宮田に会いに劇団を訪れる。今西の予想通り、宮田はリエ子の自殺の原因に心当たりがあると言い、翌日の再会を約して別れるが、結局宮田はその前に「心臓麻痺」(第八章「変事」)で急死してしまい、今西は唯一の手づるを失ってしまう。

だとしたら、このあと、今西はどのような捜査と推理によって容疑者像に迫っていくのだろうか。冒頭で先走って述べたように、第十一章「彼女の死」では、有力な容疑者として関川に関する情報が今西の手帳に記されていた。第八章「変事」の宮田の死によって唯一の手づるを失った今西は、どのようにしてそこまで辿

りつくことができたのか。

他方で、すでに述べたように、読者は第七章までですでにリエ子の愛人の和賀こそが犯人であるとの結論にたどりつくことができたわけだが、果たしてそれは作者として計算づくの展開だったのかどうか。もしそうだとすると、そのあと(第十一章)でダミーとしての関川を提示する、というのは、今西をピエロ扱いしていたとでも考えない限り(作品全体を通してそのように造形されていたとは受け取れない)、いかにも間の抜けた展開ではないだろうか。その意味では第七章での和賀犯人説がすでに勇み足(「綻び」)であつた可能性も拭えないのである。

さらに言えば、今西の関川＝真犯人説自体も、そこに至るまでの推理過程が説得力を欠くようではダミーの資格すらおぼつかないことになる。果たして今西はどのような過程を経て、関川情報を手帳に書き込むことになったのだろうか。

ミステリーや大衆小説にはありがちなことだが、それにしてもこの『砂の器』には「ふと」とか「カン」とかで話を転換ないしは進展させようとする個所が多過ぎる。すでに見た範囲で言えば、アパートの女の自殺を聞いてそれを紙吹雪の女と結びつける個所がそうだが、宮田が羽後亀田の不審者だったことを突き止める個所でも、新聞で和賀を論じた関川の文章を読んだ今西が、そこから亀田→不審者→演技→俳優→宮田と、「連想」と「カン」と「ひらめき」を働かせた結果ということになっている。ここまですべて結びつけることさえできれば、あとは宮田のアパートの大家から東北旅行の裏付けを得たり、それが亀田の報道記事を見た「ホシ」の依頼によるものだったのではないかと吉村刑事に推理させ

たり、などといったことは簡単だ。

ただ、すでに第七章でリエ子の自殺に関して宮田に証言を約束させたところで、犯人とリエ子と宮田がつながることは今西にもわかったのだから、宮田・亀田の不審者という事実は犯人像の絞り込みに役立つものではなかった。依然として今西は「彼女と犯人とは特別な関係にあり、さらに宮田邦郎がそれを知っていた」

(第九章「模索」)の先に踏み出すことはできなかったのである。

この第九章で今西がまたしても(これまでも秋田で会った一人が書いた文章という理由で注目していた)関川に注意を向けるようになったのは、近所のアパートでの若い女(リエ子)の自殺の話を聞いて妹が自分のアパートの若い女性(三浦恵美子)のことを心配し始め、さらにその女が、新聞に載った関川の文章を読んでいたと聞かされたからだ。このあと、今西は恵美子に会わせてもらうために妹のアパートにまで押しかけ、関川が恵美子の店の客であるだけでなく、恵美子が関川に好意(愛情?)を寄せているらしいこと、さらにはどうやら妊娠しているらしいこと(妹は相手の男性を関川と邪推)を知る。

次の第十章「恵美子」では、恵美子から刑事の訪問を聞いた関川が動揺して転居を促し、さらに妊娠の事実を聞かされ中絶を説いたものの拒絶され、やむなく店をやめて転居するところまでを納得させるシーンと、突然の引越しを妹から聞かされて今西があわてふためくシーンとが描かれる。

引越しには転居先がわからないよう偽装工作がされており、店も突然やめたと聞かされて、今西は不審の念をつのらせるが、といって、ここまでの段階で関川と恵美子の関係が蒲田操車場殺

人事件やその捜査とは何の関係もないことは自明であり、今西もそのことは繰り返し釈明している。「関川と彼女とがどんな仲になつていようと、いわば他人のおせつかいである」とか、「今さら自分の矛盾に気がつく。恵美子も関川も、全く捜査の対象ではない。だから、その二人を追っているのは筋が違うわけである」(第十章「恵美子」とかいったように)。

VI

つづく第十一章「彼女の死」はいよいよ、何度も指摘したように、有力な容疑者として関川に関する情報が今西の手帳に記されていたことが読者に示される章である。しかし、ここまで詳しく辿ってきたところからもわかるように、今西が関川を蒲田操車場殺人事件の犯人として疑う理由は何一つ示されていない。

この第十一章は恵美子の不自然な流産死が始まり、今西としては、不自然な引越しに加えて、話を聞こうとした宮田と恵美子が共に不自然な「自然死」をとげたことに不審の念は抱くものの、といって宮田と違い恵美子には蒲田操車場殺人事件につながる要素は何一つ浮かんではいなかった。くだいようだが、にもかかわらず容疑者として関川が挙げられてしまっているのである。いくらいっぽうで、「恵美子も関川も、全く捜査の対象ではない」

(第十章)などと釈明しようと、ミステリーとしての致命的な綻びは蔽いようもない。

本稿の目的は今西が関川を理由もなく被疑者扱いするまでを確認するところにあるので、それ以降は簡単に辿ることとするが、

このあと今西はその「致命的な結び」に基づいて関川の身辺調査を進め、お手伝いのトヨの証言から恵美子だけでなくリエ子とも関係があったのではないかと邪推したり、関川の本籍地（現在は目黒区、その前は秋田県横手市）に問い合わせたりして、結果的には徒労に終わる調査を進めていく。初出では関川の出た目黒の小学校や高校を訪ねたり、少年の関川を引き取った目黒の男性の旧住所を訪ねたりしているが、いずれにしても本稿の論旨に影響を与えるようなものではない。

第十二章「混迷」に入っても依然として今西は関川を「かなり被疑者に近い線と考え」続けているが、他方では、吉村に「それを打ちあけるには慎重にしなければならなかった」（第十二章）というような「釈明」も依然として併存している。

しかし、この第十二章の後半には、事件の解決に向けての新たな展開が立て続けに用意されている。亀嵩の桐原老人に三木の「善行」について問い合わせ、その返事を受けてさらに「ある所に問い合わせの手紙を書いた」り（第十三章「糸」で岡山県の慈光園という施設から、本浦千代吉・明治八年生まれ、秀夫・昭和六年生まれの不幸な親子に関する返事を受け取っている）、三木の息子から父親の最後の滞在地を教えてもらい、その伊勢を訪ねて三木が二度の映画館行きのあけぐに帰郷予定を東京行に急きよ変更したことを教えられたり、といったような具合に、である。

続く第十三章では、三木が伊勢の映画館で何を見たかと、本浦秀夫の消息の探索とが捜査の焦点となっていくが、前者については第十四、五章においてであり、後者については第十三章の石川県への調査行でも消息はつかめず、それが明ら

かとなるのは第十六章「ある戸籍」まで待たなくてはならなかった。ところが、にもかかわらず、第十三章で慈光園から秀夫の存在を教えられた時点で、今西の手帳には、関川と並んで和賀の情報が書き込まれていたのである。

そればかりでなく、今西はすでに和賀の本籍地（大阪）に問い合わせ、両親や本人の生年月日の情報まで手に入れていた。手帳の引用の直後には、「ある人物の分が一枚加わっている。今西栄太郎は、なぜこの人物を書きくわえたのか」というような「釈明」ともとれる文も挿入されているが、結局きちんとした釈明がそこできられることはなかった。第十一章での関川のリストアツプに続く、二つ目の結びである。

そもそも、この時点で捜査陣にとって犯人に辿りつける手づるとして残されていたのは、リエ子・宮田の線からリエ子の愛人を突き止める、伊勢の映画館で三木に東京行きを決意させたのが何かを突き止める、三木が恨みからではなく善行が原因で殺害されたのだとすれば、その有力候補である本浦秀夫の消息を突き止める、の三つしかなかったわけで、第十一章での関川や第十三章での和賀の浮上は、そのどれにも当てはまっていなかったのである。

Ⅶ

映画「砂の器」（監督…野村芳太郎、脚本…橋本忍・山田洋次）では、小説のこうした結びが完璧なまでに補修されている。よく知られているように、複雑な人間関係を、男性のほうは和賀に、

女性のほうは女給の高木理恵子に一本化することで「複雑さ」問題に対処しているのだが、何よりも、今西をはじめとする捜査陣が真相に迫っていく過程が理路整然と描かれているのだ。

映画では俳優の宮田も劇団事務員の成瀬リエ子も登場しないので、血にまみれたシャツを隠すレインコートの紛失などという趣向もないし、亀田の不審男も和賀本人でないとすれば何の関係もない男ということになる。ただ、紙吹雪の女が女給の高木理恵子で、刑事が聞きこみに来たことからバーをやめて姿を隠す、という展開は小説とも重なる部分が多い。のちに回収された布切れが鑑定に出されて犯人とのつながりが濃厚となり、高木理恵子の線から犯人に辿りつける可能性が浮上したが、結局捜査陣は彼女を採し当てるができなかった。その間に、彼女は流産死でいったん身元不明として処理され、ほどなくアパートの大家が失踪届けを出したことで遺品は大家に引き取られたが、「石井」という仮名で入居していたために、捜査陣の知るところとはならなかった。

そんななか、映画ではどのようにして容疑者像が絞られていったのかという肝腎な点についてだが、映画でそのキッカケとなったのは、今西が伊勢の映画館に掲げられていた田所一家の写真の中に和賀の顔を発見したことであった。これを受けて吉村が和賀を尾行し、亡くなっていることも知らずに高木理恵子のアパートに立ち寄ったことから二本の線が繋がったのだ。前述の小説における三つの手づるのうちの二つが、理路整然と活用されていたというわけである。

小説『砂の器』が抱える致命的な綻び、そしてそれを映画「砂

の器」が見事に補修した経緯は以上のようなものだが、最後に、いったい小説『砂の器』はなぜあのような綻びを抱え込むことになったのか、という点について一つの推測を書き添えておこう。それは、言うまでもなく、拙稿「清張と純文学派―対決の構図―」で明らかにしたヌーボー・グループのモデル問題に関わる。

「清張と純文学派―対決の構図―」や「天城越え」は「伊豆の踊子」をどう超えたか（同じく拙著「清張 闘う作家―「文学」を超えて」所収）で明らかにしたように、清張はこの時期、純文学派に対して激烈な闘争心を抱いていた。それが、「天城越え」における文壇の大御所である川端康成やその代表作に対するチャレンジとなっていたわけだが、その相手は川端ひとりにとどまらなかった。既成文壇全体を敵に回して、の感もあるほどにその闘いぶりは激烈を極めていた。そんななか、純文学派のホープである文芸評論家の江藤淳にも、攻撃の刃が向けられることになったのである。清張と江藤との確執については「清張と純文学派―対決の構図―」でも詳述したが、それが勢い余って、今とときめく若手文化人グループをモデルとしたヌーボー・グループの敵視、さらにはその若手文化人グループの中心人物である江藤淳をモデルとした関川に対する（いわれなき犯人扱い）へと暴走していったのではないだろうか。

（ふじいひでただ 本学教授）